

空と重力と林檎、そのオルターエゴ

その語自体に「果物」という意味を含む **Apple** は、ある意味で「フルーツオブフルーツ」で、言いかえると「世界でもっともめずらしくない」果物です。そんな林檎と僕のかかわりは「数あるモチーフのひとつなのでそんなに詳しくないです」とも言えないぐらい長い付き合いになりつつあります。そこに青森県立美術館からオファーがあり、しかも「農業とアートの展覧会」とのこと。普段はリサーチが前面に出ている作品はつくるのも見るのも「右脳の敗北を自己申告している」ように感じて好きにはなれないのですが、今回だけはリサーチを含めた林檎の作品をベタにやってもいい、というかそろそろやった方がいいのではないかと予感しました。

まずは出発点を明らかにするために、自分と「林檎をモチーフにした作品」との関わりを時系列にすると

1999年

最初の林檎制作 さまざまなモチーフの彫刻の中の1つとして林檎を作る。

2005年～

二度目の林檎制作。はじめて溶けたリンゴ3個を作る。以降、溶けてないものや白黒のもの、絵の具が付いたものなど、断続的に現在まで約70個制作している。溶けるというリアリティの欠損に対して「本物以上に表面がリアルじゃないと作品として成立しない」苦しみを毎回味わう事になり、早く作品を仕上げるためにも「いったい林檎を林檎たらしめているものはなんだろう？」と、考えざるをえなくなる。

2011年 ヨーロッパに拠点を移すこの年までは粘土を原型に無発泡ウレタン（プラスチックのようなもの）に油彩、以降は木材に油彩となる。

2015年

具体的なリサーチを開始。ベルリンのスタジオにある林檎の樹の観察を始める。
日本のスタジオに林檎の苗を植える。

2017年

「普遍的な林檎（仮）」プロジェクトの準備開始。

2018年

数回にわけて青森にてりんご史料館（黒石市）、農協、貯蔵庫等でのリサーチを行う。
『青森県のりんご』著者の杉山芬氏を訪問。
荒川修教授（果樹園芸学／弘前大学農学生命科学部）を訪問。
木村木品製作所にて林檎木材買い付けと製材の依頼。
林檎農家にて農作業研修。

2019年

ベルリンのスタジオの林檎の樹を実験樹とし、部分的に農業を施し経過観察を始める。
青森県立美術館にて展覧会参加（10月～12月）。

2020年

林檎の農業開始（条件がそろい次第）
彫刻《りんご（普遍）2020》を制作開始予定。

2023年

林檎の貯蔵庫、ショーケースなどの業者さんと展示ケースを共同開発。ケース内部はCA貯蔵（低酸素）、0～1℃にて変色を出来る限り抑え、変化が許容範囲にとどまる間のみ「りんご（普遍）2019」（彫刻）と並べて展示、それを展覧会期間とする。
～（期間未定）
彫刻と果物を並べて展示するために彫刻《りんご（普遍）2019》に似せた「果物の」林檎を農業によってつくる。何年かかるかは未定。

そもそも僕が林檎をつくりつづけている理由は、ひとつには林檎の表面の多様さにあります。林檎は世界一ポピュラーな果物である反面、国や地方によってその見た目が大きく違います。むしろ、同じ樹になっているものでもずいぶんと幅があります。林檎を作り始めたばかりの頃には、嬉々としてその多様さを表現することもあったのですが、ある時からその「バリエーションのひろさ」ではなく、「皆にとつて的林檎らしい林檎」を作ってみたくなりました。無限に存在するローカルアピランス（要するに無数にある各々の「私にとつて的林檎」）があるなかで「皆にとつて的林檎らしい林檎」を作るにはどうすれば良いか頭を悩ませることになったのです。

普段、林檎彫刻の表面を描くときには、単に「作り物の原型に果物の表面をコピーして描き写す」ということをしているわけではありません。例えるならば「林檎がどのような気候や地形で育ち、収穫され、どんな保管

をされて今手元にあるのかという物語を読み解き」、その文脈における「現在」を表面に描くという作業をしている事になります。ややこしい言い方に聞こえるかと思いますが「つぼみから花が咲き、実になり、なぜコルク質の点が現れ、どの段階で赤く色づくのか、どうして色のムラがあるのか」などの現象を、その林檎に起きた時系列の「物語」すなわち前後のシークエンスのある映像として頭に描き切らないと不自然になってしまうのです。

しかもさらにややこしいことに、そのシークエンスは「地球」という大きな摂理に即していないといけないのです。例えば林檎の軸を思い描く時に自然とカーブさせる、もしくはカーブしているほうが自然に思えるのはなぜか？それは「上からの太陽光線を光合成するための葉と同じ方向に咲く花が実になって重くなると下にさがってくる＝だから林檎の軸は多くの場合カーブしている＝上方に空があり重力は下方にかかる＝地球にいる」みたいなことです。極端につなげると、「林檎の軸がカーブしている（ほうが多くの人にとって自然と感じる）のは、われわれ人類が長い年月を地球の表面ですごし、それを普遍的な認識の基礎とみなしているから」となるわけです。人間の目は結構シビアな判定が可能で、そこに記号としての林檎っぽい模様や色があったとしても、その「物語」のなかにローカルをつらぬく「普遍性」を無意識にでも発見できないと、人はそれを「本物らしい」と判定しない仕組みになっているのです。

さらに踏み込んで林檎の表面をスキャンしてみると、最も興味深いことの1つは、例え同じ品種であっても、農業の施され方で全く違う外見になることです。例えば簡単に言うと日本の農業では、中心花を残して他の5、6個は摘「花」してしまい、数週間後にはさらに摘「果」し、個数を減らすことによりひと玉をできるだけ大きく育てるわけです。さらに、果実を廻したり、葉を摘んだり、マルチシートにより地面からの反射光を作ったりもします。袋掛けもまた赤色変化のためのアントシアニンを増加させる方法のひとつです。ようするに日本の農業ではモデリングもカラーリングもしているのです。これはある種、農家の手によってすでに「彫刻」されているようなものです。一方、ヨーロッパの一般的な林檎は、過度な摘果をしないために全体的に小ぶりで、隣接する果実同士がお互いの日照を遮るために、さまざまな焼け残りのパターンがあらわれます。

ここで「林檎の表面を見つめる面白さはどこにあるのか？」を一旦整理すると、それは、表面のあらわれを解析していくと素数としての「人の営み」に行き当たることです。すなわち林檎表面から読める農業の履歴を逆再生することで、果実の表面から「人」が映像化される。そう、少なくとも僕にとって林檎の表面をみつめることは「社会」や「文明」をみつめることでもあるのです。

むろんこれら農業の差異は、単なる国民性の差ではなく（それもあるとは思いますが）、実は全国生産量の半分以上を占める青森県が、そもそもは林檎育成に向いていない土地であった可能性（セイヨウリンゴ発祥の地コーカサスに比べ平均的に多湿で夏暑く冬豪雪）にもよると予想しています。ようするにしっかり手をかけないと林檎がちゃんと収穫できないのです。

「奇蹟のりんご」で有名な青森の木村さんは無肥料無農薬で最初の7年間は林檎がひとつも成らず生活は困窮を極めたといいます。それに反して僕の今住んでいるベルリンでは、うち捨てられた「野良犬」ならぬ「野良林檎の樹」でも必ずと言っていいほど沢山実をつけます。僕のスタジオには誰も管理していない高さ7メートル程の野良林檎の樹があり、毎年たわわに実をつけます。

さて、そんな、林檎農業にとって最適「ではないかもしれない」土地＝日本における林檎の歴史は、1871年に苗を買い付け1875年に青森県に3本の苗木が届いたことから始まります。それから約150年後の現在、林檎は言わずとした青森県の主戦力となったわけです。あくまで都市伝説と前置きした上で関係者が話してくれたのは、林檎の収穫が良い年と悪い年で大きく県の税収が変わる→美術館のような文化施設の企画に割り当てられる予算が少なからず変わる（ことがあった）＝「林檎の成りが良いと良い展覧会がひらかれる」とのこと。林檎収穫量と展覧会予算の相関における真偽のほどは定かではありませんが、青森県において県民の生活や文化と林檎が密接な存在となったのは疑う余地はないでしょう。

すいぶん遠回りしましたが、ようやく土壌が整い、今回の展覧会の話ができるところまでできました。

今回僕は「普遍的なりんご」を作ってみる事にしました。「普遍」とは「ある範囲のなかで全てに当てはまる性質」または「宇宙や世界の全体に対して言えること」です。当たり前ですが、世界の全員に共通の「友達」「車」「お酒」「神様」ましてや「正義」なんてありません。そう、「普遍的な林檎」なんて最初からあるわけがないことは承知していますし、そもそも人類は「普遍性」についてもう2000年以上も考え続けています。哲学者でもない僕がそこにわざわざ加わりたいなどと思うはずもない一方で、インターネットの普及はもちろ

んのこと、ニューラルネットワークやディープラーニングが一般名詞として日常会話に現れてきた現在、人類にとってなにが「普遍」なのか？あらためて「普遍性」について考えてみたいと思ったのです。

現時点（2019年7月末）で決めている展覧会の内容ですが、約180㎡（約15×12m、高さ6mの真っ白な展示空間に唯一存在するのは

- ①林檎の木材に油彩で彩色された《りんご（普遍性）2019》というタイトルの実物大の林檎の彫刻1個のみ。それとは別に
- ②展示空間の壁に開けられた穴ごしに見る事のできる、バックヤードに配置された《林檎と普遍性について》というタイトルのリサーチにまつわるインスタレーション。

以上計2点で構成された展示になります。

②の中には林檎というトピックを通じて普遍性を考える厳選された本（今のところ一冊のみ）だけを蓄積していく「Perfect Apple Library」のほか、「インターネット上にある無数の“林檎”をデータベースに、もっとも“一般的な林檎”を、AIを使って導きだしてみる」過程を記録した映像作品を含む予定で、現在、プログラマーと一緒に準備をすすめているところです。インターネット上で複数の言語により「林檎」を検索し、自動的に集めたデータベースに対して「これは林檎です（アップルコンピューターとか椎名林檎じゃないですよ）」と判断するAIによって、より「果物の林檎」の純度を高くし「林檎らしい輪郭を判定して切り抜くAI」をかけてデータベースを仕上げ、それらの切り抜かれた画像群をもとに機械学習（ニューラルネットワークによる学習）を行い、最後に検索エンジンに再度かけてみて一番「Apple」としての確度が高いものを選ぶ、というやり方で、出来るだけ人間の手を介さずにインターネットにひろがる世界から「もっとも林檎らしい林檎」を導きだしてみる、というような試みをしています（データサイエンス：三上航人）。

僕にとって、その精製され続ける機械学習の結果が面白いことのひとつは、その過程がアートヒストリーをトレースしているように見える事です。ヤン・ファン・エイクの祭壇画然としてはじまり、レオナルド・ダ・ヴィンチの滑らかなグラデーションが出現し、ルーベンスの筆致やベラスケスの明暗、ターナー、ゴヤから印象派、そしてとうとうはっきりと時代をまたがせたセザンヌの出現（そもそも林檎といえばこの人みたいな人なのですが）、三次元的な存在論が入ってきてキュビズムへと進む。そんな、人類と美術史の再演みたいな事が林檎にまつわる機械学習を通じて行われているように見えるのです。

現時点では僕の頭の中の「データベース」と「らしさ」や「揺らぎ」「確度」の判定、それらを「物理的に再現する技術」、すべての解像度が圧倒的に僕の方が上なのでこの機械学習自体が彫刻にそのまま反映されるわけではありません（5年後10年後さらに進歩したAIとそれに接続された3Dプリンタの精度が上がればシンギュラリティを賭けて楽しい勝負ができそうです）が、現時点においてさえもインターネットに広がるデータベースからAIを使って濾過した「一般性」が「普遍性」とどのような距離をとって現れるのかを目視したいという欲求から進めている次第です。

まとめますと、林檎というモチーフを多角的に用いて「一般性」も含めた、現在における「普遍性」について考えてみたいというのが今回の展示で目指すところです。きっとそんな事を僕が積極的に思いついたというよりは、林檎に「考えさせられた」だけなのかもしれません。なぜなら林檎は「自家不結実性」といって、基本的に他の品種の林檎からしか受粉しません。純血から遠ざかるプログラミングを繁殖の基幹とし、自らに多様性を運命づけています。そして、多様性を包摂するのは「普遍性」ではないのだろうか、と、「自家不結実性」は半ば自動的に「普遍性への考察」へと走らせるのです。

たった150年前に日本に流れ込んできた西洋文明のひとつとして「Apple」はその訳語が無かったために「林檎」と翻訳されました。一方、時を同じくして日本にはじめてインストールされたけれども対訳する日本語がなく「美術」と翻訳された「Art」。林檎を機械学習させると美術史の再演が発生するのは偶然ではないのかもしれない。ともに150年の真新しい歴史をもつその一方をオルターエゴと呼ぶのが言い過ぎならば、少なくとも夜に併走する列車のようにお互いをうす暗く照らし出し、ぼんやりと浮かび上がる赤い果実を横目で見つめるだけでも私たちにとって一考の価値があるように思えるのは僕だけだろうか。

2019年7月31日
雨宮庸介